



町の子供は町で育てる

「3つの合言葉」元氣・学び・会話

滑川町教育委員会だより

「学んでよかった町へ -チーム滑川での教育-」

ピンチをチャンスに変える生き方

こどもの頃、体操競技をテレビで観ることが好きでした。ある競技会の放送の中で解説者（1964年の東京オリンピック金メダリストの遠藤幸雄さんだったと思われます）が「ケガは、チャンスでもある」と発言していました。例えば足のケガをした場合、床運動や跳馬といった種目の練習はできなくなりますが、主に腕や体幹を使う吊り輪の力技や鞍馬の旋回などの力量を高めることができますということです。ピンチをチャンスに変える考え方に感心した記憶があります。

9月11日の東京新聞に村上由美子さん（経済協力開発機構（OECD）東京センター元所長）の「人しかできない仕事とは」という記事がありました。村上さんの息子さんはアメリカの大学でコンピュータサイエンス（CS）を専攻しているそうです。つい数年前までは「CSは無敵」とまで言われ、グーグル、メタ、アマゾンなど大手テクノ企業は才能ある若者を高待遇で奪い合っていました。その頃は皆、「プログラミングを学べば、喰いっぱぐれはない」と信じて疑いませんでした。ところが今、その「神話」が音を立てて崩れつつあります。背景にあるのはここでも人工知能（AI）の普及です。AIの普及によってテクノ企業が「人」の採用枠を減らしているのです。この波は何れ日本にもやってきます。これまで順調にプログラマーへの道を歩んできた村上さんの息子さんにとっても大きなピンチを迎えたわけですが、9月から始まる新学期から息子さんは哲学と世界史の授業を履修するそうです。息子さんは言います。「4年間学んだプログラミングはAIがあれば4秒でできる。人間にしかできないことがあるとしたら、それは人類の思考や歴史からの学びではないか」と。息子さんはこれまでは「CSを学ぶ」に専念してきましたが、CSの知識を持った上で「機械にはできない仕事とは何か」との問いに向き合おうとしています。村上さんの息子さんもピンチをチャンスとして捉えています。

葉っぱ切り絵アーティストのリトさんをご存じでしょうか。検索エンジンで「リト」と入力していただければ、すぐにリトさんの作品に辿り着きます。是非ご覧になっていただきたいと思います。リトさんは高校大学を経て就職しましたが、「ミスが多く、何度教わっても失敗する。一つの作業に没頭すると周りが見えない。まじめに働いているつもりでも怒られてばかり」でした。30歳を過ぎて病院で発達障害のADHDと診断され、没頭しすぎるのは、発達障害の特性の「過集中」だと分かりました。リトさんは「過集中をうまく使おう」と葉っぱ切り絵を始めました。次々にすばらしい作品を発表し、今やInstagramのフォロワーは65万人を超え、世界的にも関心を集めています。リトさんもまた、ピンチをチャンスに変えたのです。

人生は山あり谷ありです。雨が降ることも風が吹くこともあります。でもそれは、時に「干天」とよぶ「慈雨」となったり、帆船にとっての「追い風」となったりもします。一見不利な条件に見えても、そのことを「いいこと」に瞬時に「書き換える」ことができる…そのような人こそが本当の意味で「生きる力」を身につけた人なのでしょう。

「あららかに わがたましひを 打つごとき この夜の雨を 聴けばなほ降る」若山牧水の歌です。



図書館からのおすすめ絵本



図書館では、家族が一緒に本を読むことで、読書に親しんでもらうとともに、家庭内のコミュニケーションを深めることを目的とした「家読」(家庭読書)を推進しています。
こどもも大人も楽しめる、家読にぴったりの絵本をご紹介します♪



『いつまで いっしょ?』

こんな人におすすめ

いつまでも一緒にいたいひとがいる方

『いつまで いっしょ?』
クリストファー・チェン 文
スティーブン・マイケル・キング 絵
絵なかがわちひろ 訳
国土社

仲良しのパンダさんとネズミちゃんは、いつもいっしょに過ごします。
ある日、ネズミちゃんは不安になって、こんなときでもいっしょにいてくれる?とパンダさんにたくさん尋ねました。そのたびに、パンダさんは優しく「いつもいっしょだよ」と言って、手を差し伸べてくれます。「もし、わたしがパンダさんがついてこれない遠いところへ行ってしまったら、どうする」と聞かれたパンダさんは…。

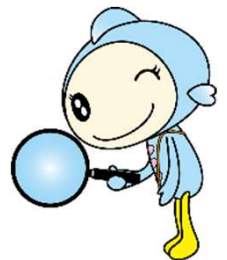
いつかお別れの日がきたとしても、相手との大切な思い出があれば、きっと乗り越えていけるはずです。相手を大切に想う2匹の優しさを感じる1冊です。

※この本は、滑川町立図書館に所蔵があります(貸出中のときは予約ができます)

文化財
シリーズ!
第8回

「滑川町の歴史」 part8

古墳時代の滑川町～土師器と須恵器2つの器～



古墳時代は一般的に前期、中期、後期の3時期に区分され、3世紀末～7世紀初頭までの約350年間続きます。

滑川町では、古墳時代の遺跡が最も多く確認されており、時代の名前のとおり町内でも古墳や古墳群が造営され、確認される集落数も増加します。

古墳時代には、使用される器も変わり、土師器と須恵器と呼ばれる2つの土器が使用されます。土師器は弥生土器などと同様野焼きで作られる土器ですが、基本的には文様や装飾がありません。前期には、台付甕、中期には高坏、後期には模倣坏が代表的な器として使われました。特に後期の模倣坏は、須恵器の坏を模倣したもので比企型坏など地域色が強い器が作られました。また、器台や埴など祭りの道具として使われるものもありました。

須恵器は、大陸から伝わった新たな技術で作られた土器で、滑川町では羽尾の五厘沼窯跡群や平谷窯跡群、花気窯跡などの窯で作られました。また、須恵器は古墳への副葬品としても使用されました。滑川町でも各時期の土器の形の違いから様々な影響を受け、生活が劇的に変化していった様子がわかります。滑川町では弥生時代の新井遺跡で1辺10m前後の方形周溝墓6基などが発掘調査されており、当時の墓制の様子を知ることができます。



月輪遺跡出土の土師器



町内窯跡出土の須恵器